# 航空ファン
# KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR
メッサーシュミット
Me 262



☆特集☆
VTOL戦術機ハリアーの意義と価値
新連載・世界のジェットエアライナー
遠距離の高々度爆撃機立川／陸軍キ74

'75 7
JULY

BUNRIN-DO JAPAN
$3.30

# 岩国基地のハリアー部隊 （61ページ本文記事参照）

HS Hurriers of VMA-513 stationed at MCAS Iwakuni



岩国基地に駐留するハリアー部隊はVMA-513（第513海兵攻撃飛行隊）。[illegible]したVTOLの画期的な戦術攻撃機ハリアーを装備した最初の部隊である



VMA-513のニックネームは，ほー，ほー鳴くフクロウという意味の“Hoot Owls”。本誌でも紹介したように，昨年8月に空母で来日して以来，岩国を基地に，フィリピンに移動したりして訓練を行なっている。



岩国のエプロンに並んだハリアー。駐留しているのは16機。現在ハリアーで編成した海兵隊の航空部隊は，訓練飛行隊1個飛行隊を含めて4個飛行隊。海外に駐留しているのはこのVMA-513のみで，ほかはノースカロライナ州のチェリー・ポイントをホーム・ベースにしている。




# トムキャットの新しい部隊

F-14A of VF-14, NAS Jacksonville, Fla. (Photo by R.E. Kling)

フロリダ州ジャクソンビル海軍航空基地で訓練中のF-14Aトムキャットの新しい部隊，第14戦闘飛行隊（VF-14）。F-14Aは，この1月までに114機が海軍側に引渡され，実用部隊5個飛行隊が編成されている。西海岸で編成された第1，第2戦闘飛行隊（VF-1，VF-2）は，すでに空母エンタープライズの第14空母攻撃航空団（CVW-14）の傘下に入って航海に出ている。西海岸ではさらに訓練部隊であるVF-124のほか，VF-142とVF-143がカリフォルニア州ミラマー基地で訓練をつづけており，来年初めに空母アメリカに配属される。写真のVF-14は東海岸で編成された最初のF-14A部隊。同じくバージニア州オシアナ基地で編成されたVF-32とともに，空母ジョンF.ケネデイに配属されて，地中海方面に展開することになっている。




(Photo by R. E. Kling)




Grumman F-14 Tomcat of VF-14 while training at NAS Jacksonville, Fla.
(Photo by R. E. Kling)



このページもジャクソンビル基地で訓練中のVF-14のF-14A。F-14Aは1977年までに330機余が海軍側に引渡され，海軍部隊14個飛行隊，海兵隊4個飛行隊が編成されることになっており，海兵隊の最初の部隊VMFA-122は，1978年に岩国に派遣される予定である。

(Photo by R. E. Kling)






# F-4ファントム スナップ集

F-4 Phantom "fly-by-wire" test-bed.

〔上・下〕フライ・バイ・ワイア操縦装置のテストに使われたF-4ファントム。この機体はもともとRF-4Cの原型として完成した1機であるが，のちに写真のように，F-15や最近のF-4に採用されたフライ・バイ・ワイアの研究用として改造され，そのあとでは機関砲を付けて，F-4Eの原型としても使われている。さらに最近では，カナード（先尾翼）を付けて実験されており，システムス・コマンドの"歴戦"のファントムである。写真はエドワーズ空軍基地で公開されたときのもの。


FLY BY WIRE
USAF
12200




ハワイのカネオヘ・ベイに駐留する第212海兵戦闘攻撃飛行隊（VMFA-212）のF-4

F-4J of VMFA-212, MCAS Kaneohe Bay, Hawaii
Photo: Dr. [illegible]




ワシントンDCの海軍航空施設飛行場で撮影した第142戦闘飛行隊（VF-142）のF-4J。

F-4J of VF-142, NAF Washington D.C.
(Photo: Dr. J. G. Handelman)



18 F-4F of German Luftwaffe, Eglin AFB, Fla. (Photo: R. E. Kling)

フロリダ州のエグリン空軍基地で撮影した西ドイツ空軍のF-4F。同国空軍パイロットの訓練に使われている機で，胴体には米軍マークをつけている。

# ヒッカム飛行場の翼たち




F-102A oi 199FIS, 154FG, Hawaii ANG, Hickam AFB. (Photo by K. W.)

ハワイのヒッカム空軍基地で撮影したF-102A。ハワイ州航空警備第154戦闘大隊第199戦闘迎撃飛行隊の所属機。




Navy-assigned B 47, Hickam AFB, Hawaii. (Photo by K. W.)

前ページと同じくハワイのヒッカム飛行場で撮影した米海軍が使用している珍らしいB-47。

# 世界のジェット・エアライナー　①




Boeing 747 of Braniff International, Honolulu, Hawaii. (Photo by K. W.)

ブラニフ航空のボーイング747、ホノルル空港にて撮影。

（70ページ本文記事参照）

# 日本の周辺に姿を見せたソ連軍用機

Tupolev Tu-16 Badger A

透明な機首のツポレフ Tu-16バッジャーA洋上哨戒機。機首下方に小さなレドームの張り出しがあり，機首，尾部，胴体上下の砲塔などに防御用の23mm機関砲7門を装備している。





Tu-104旅客機の原型でもあるTu-16爆撃機には，バッジャーA，B，C，D，E，F，Gと7種の型があることが確認されている。BはAと同じく機首が透明だが，両主翼下にターボジェット動力の対艦船ミサイル（NATOコード"ケンネル"）用のパイロンを付けたもの。C型は機首先端に大きなレドームが張り出して透明部がなくなり，胴体下に"キパー"対艦船ミサイルが装備できるようになったもの。　写真上のバッジャーDはCと基本的に同じだが，機首下のレドームがやや大きくなり，中央部胴体下にさらに3つのレドームの張り出しがついた。

写真下は機首が画面からはみ出ているが，透明な風防のバッジャーA。バッジャーAはソ連で最初の長距離戦略ジェット爆撃機。1955年以来，ソ連空海軍の主力爆撃機として使われているが，爆弾倉にカメラを装備したバッジャーE，さらに両翼下に電子ポッドを付けたバッジャーFがあり，この両型はD型ととも，現在長距離洋上哨戒の主力機とみられている。23ページとこのページの2枚は，北海道西方の日本海上。前ページは三陸沖の太平洋上で自衛隊機が撮影したものである。

⬇ Tupolev Tu-16 Badger A





写真上は，水上艦艇や潜水艦あるいはほかの航空機からの対艦船用ミサイル発射の目標標定，誘導などに使われているツポレフTu-95ベアD。胴体下に大きなレドームが張出しているのがこのD型の特徴で，機首上方には空中給油の受油棒を突き出している。日本周辺に進出するソ連機には，日本海から対馬海峡をぬけて太平洋を北上する日本列島一周型，日本海から日本本土接近をくり返す日本海南下飛行，太平洋を房総沖まで南下してふたたび北上する「東京急行」などがあるが，上の写真は鹿島灘沖洋上でとらえた「東京急行」の1機。

写真下は，北海道西方の日本海上で撮影したアントノフ An-12カブ。電子装備をした電子偵察型とみられる機体で，機首の上下に各種のレーダー・アンテナが見える。ソ連の軍用機が日本本土周辺に接近するのは，気象観測，流氷調査，魚群探検，航法訓練，日本の防衛能力のテスト，米第７艦隊の監視などの目的のためといわれるが，去る４月中旬のように，集中的に連続して接近するのは異例のことであった。





Tupolev Tu-16 Badger





前ページとこのページも，日本本土に接近したソ連のTu-16。いずれも機首が透明風防の機体で，前ページ上とこのページ2枚は，爆弾倉にカメラを装備したバッジャーEと思われるが，左上の機体は，胴体下にD型と同じように，レドームを増設している。左ページ下は両翼下に電子ポッドを装備したバッジャーF。





Tupolev Tu-95 Bear D

A consecutive and "without notice" approaching the Japan mainland in April by such Soviet military aircraft as the Tu-95, Tu-16, Be-12 and An-12, kept JASDF intercepters awake and busy getting into scramble missions. Carried here is the Tu-16 Badger, one of those aircraft, photographed by an intercepter while on a mission.

Antonov An-12 Cub



# Hoot Owls



岩国基地第513海兵攻撃飛行隊
**VMA-513, Iwakuni**

（本文61ページ参照）



訓練飛行に向かうAV-8A。



ウィリアムJ、ショイレン中佐の率いる、第513海兵攻撃飛行隊（VMA-513）16機のAV-8Aハリアーが岩国基地に配属になったのは昨年8月13日。以来ここをホームベースとして連日飛行訓練を行なっている。



The 16-strength Harrier squadron VMA-513 "Hoot Owls" led by LtCol William J. Scheuren has been in hard training since August 13, 1974, when they arrived here, MCAS Iwakuni. Ltcol



Hoot Owls（フート・オールズ）はVMA-513のニックネームで、複数のフクロウの鳴き声の意でハリアーをフクロウにたとえている。胴体下面に装備しているのは30㎜アデン砲ポッド











機首側面に見えるのはF.95カメラ。右はコックピット



# ハリアー戦闘展開訓練

## Harrier Deployment Test At Zambales, Philippines.



去る2月、VMA-513は岩国にある第12海兵飛行大隊（MAG-12）の前進基地のあるフィリピンのザンバレスで、地上支援部隊と合同の戦闘展開訓練を行なった。以下の写真はそのときのスナップである。



胴体下に30㎜アデン砲を装備して訓練に向うAV-8A。





Supported by MAG-12 and MWSG-17, the VMA-513 "Owls" conducted a practice in February at Zambales, Philippine Islands.



翼下爆弾架に25ポンド訓練用爆弾を装備して離陸するAV-8A。







訓練を終えて着陸するＡＶ-８Ａ。



# グラマンF-14Aトムキャット



Grumman F-14A Tomcat




グラマンF-14トムキャットは、昨年末までに113機が米海軍に引渡されており、最初の艦載部隊であるVF-1とVF-2は空母エンタープライズに配備されている。そして新部隊のVF-14とVF-32の両飛行隊もジョンFケネディへの配属を前に現在実用テストが行なわれている。






このページは空母フォレスタルで行なわれた艦上テストの模様。

Tests aboard the USS Forestal







エンタープライズ上で着艦テストをするトムキャット。



エンタープライズに配備されているVF-1所属機。




着艦進入するＶＦ・1所属機



カリフォルニア州サンディエゴ上空を飛行するＶＦ・1所属

# ふぉーとにゅーす




マレーシア空軍が12機発注しているセスナ402双発練習機の1号機が、カンサス州ウイチタで引渡された。

このほど完成したミラージュＦ１の43号機。フランス空軍では、すでに２個飛行隊が実戦配備されている。





勢ぞろいしたダッソー・ブレゲーの軍用機。手前からアルファジェット、ミラージュＦ１Ｅ、ミラージュＦ１、シュペル・エタンダールの各機。




ガルフ・エアのトライスターの機体塗装完成予想写真。
これはトライスター用として新たに考案されたもの。




ベルギーの航空会社ＴＥＡ（トランス・ヨーロピアン・エアウェイ）向けのA300B1号機。



初飛行したエアバスの長距離型A300B4







デモ飛行でアフリカのスーダンを訪れたアントノ
An-26輸送機。ソ連は同機を低開発国向けの輸送機とし
売り込んでおり、スーダンは最初の訪問国である。（T
S.S）




4月初めに初飛行して、このほどモスクワのシェレメチェフ空港で公開されたYak42の1号機。同機はYak40の発達型で、ロタレフD-36ターボファン・エンジン3発装備で、乗客110～120人乗り。(TASS)



今年7月に予定されているソユーズとアポロ飛行船のドッキングの際のソ連コントロール・センター(TASS)





ラバウルで引き揚げられ、オーストラリアで復元された、零戦21型改造の複座偵察機が東京上野の国立科学博物館に展示されている。これは日大教授の[illegible]氏が買いとり寄贈したものである。

# スナップだより




去る3月16日、ルーマニア大統領来日時のルートサーベイで伊丹空港に飛来したルーマニア航空のB707（豊中市　伊藤直行）。




韓国に駐留している第8戦術戦闘連隊第80戦闘中隊の隊長機と思われるF-4D（昭島市　山内裕之）。

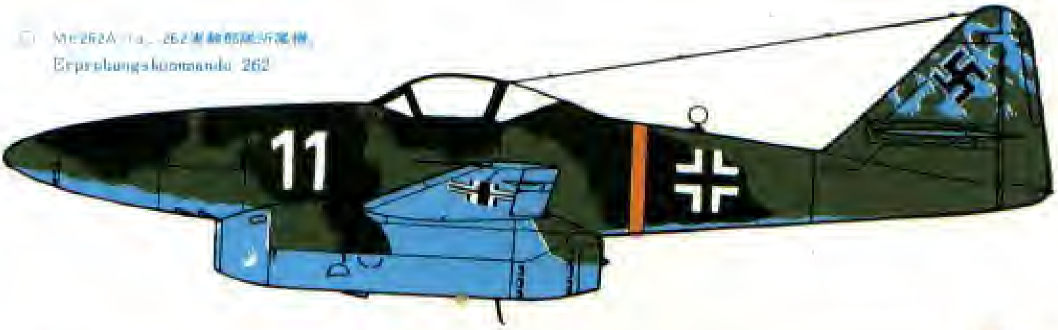
空母ミッドウェイ所属の第56攻撃中隊機、機首の帯が胴体上部までのびた新塗装となっている（昭島市　室岡清人）。



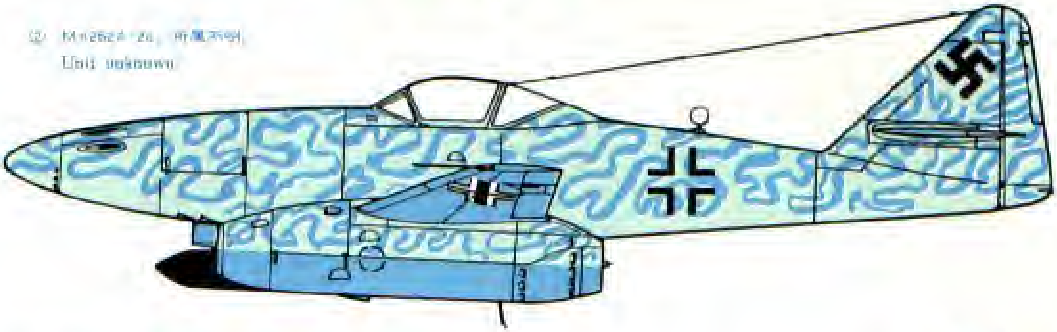
イドカラー
DE COLOUR

# MESSERSCHMITT Me262

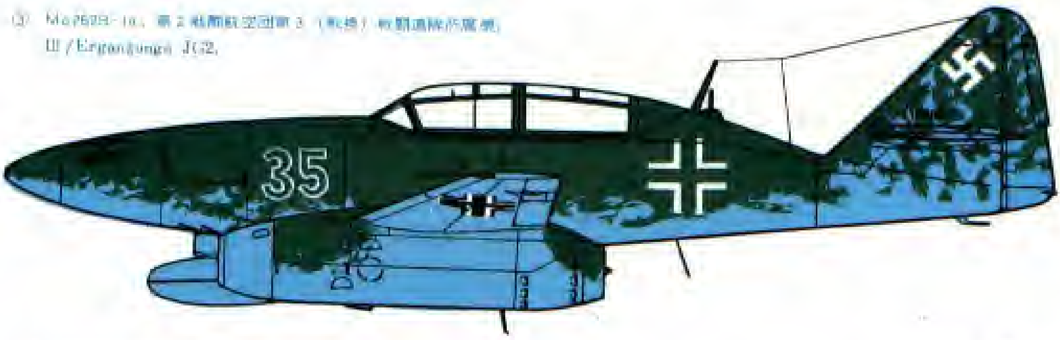
① Me262A-1a、262実験部隊所属機。
Erprobungskommando 262



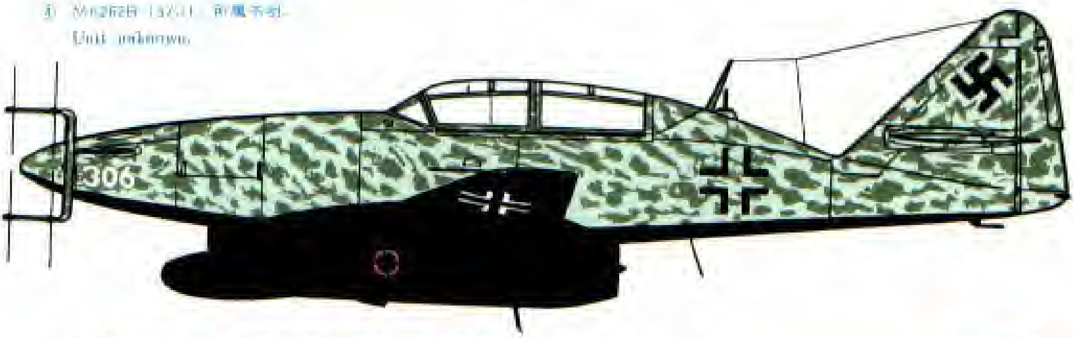

② Me262A-2a、所属不明。
Unit unknown.



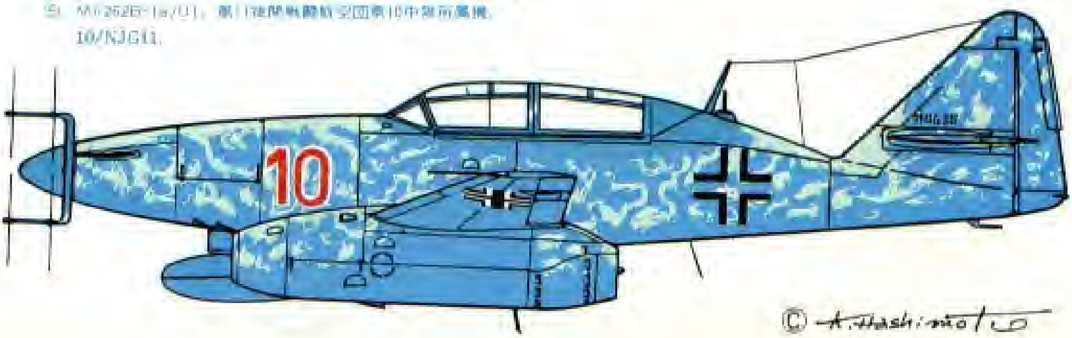
③ Me262B-1a、第2戦闘航空団第3（補充）戦闘飛行隊所属機。
III/Ergänzungs JG2.




④ Me262B-1a/U1、所属不明。
Unit unknown.




⑤ Me262B-1a/U1、第11夜間戦闘航空団第10中隊所属機。
10/NJG11.




© A.Hashimoto

# カーチス　トマホーク／キティホーク

## CURTISS TOMAHAWK／KITTYHAWK



カラー・ページでごらんのように，15,000機も生産され，連合国各空軍で使われたカーチスP-40。ここではイギリス，オーストラリア，ニュージーランド空軍のトマホークとキティホークをご紹介しよう。

最初の生産型P-40のイギリス空軍向けがトマホークI，戦訓を入れて防弾・武装を強化したP-40Bのイギリス向けがトマホークII，機首下にラジエターが大きく張り出したP-40D／Eのイギリス向けがキティホークI／IA，さらに米陸軍にウォーホークの名で採用されたP-40Fのイギリス向けがキティホークII，P-40K／MがキティホークIII，最後の生産型P-40NがキティホークIV(4)と呼ばれたのは皆様よくご承知のところ。英連邦空軍には985機のトマホーク，約3,000機のキティホークが装備されている。

↑ Kittyhawk IA with six wing guns.

↓ Tomahawk I.





⬆⬇ Tomahawk I and two IIAs of No. 26 Sqdn.

〔左上〕1941年末からイギリス空軍に装備されたキティホークIA。英連邦空軍には，キティホークIが650機，IAが約1,500機装備されている。IAでは主翼の12.7mm機関銃がIの4挺から6挺に増やされた。

〔左下〕1940年9月から英国への引渡しが始まったトマホークI。フランス空軍向けの仕様で作られたトマホークIは，武装や防弾が貧弱で実戦では役立たず，乗員の訓練や戦術偵察に使われたにすぎなかった。トマホークIは140機装備されたが，IA，IBとして武装・防弾を強化したのもあった。

〔上・下〕イギリス空軍の第26スコードロンに装備されたトマホークIとIIA。






15,000th FIGHTER




↑ Tomahawk IIA of No. 403 "Wolf" Sqdn.

〔上〕イギリス空軍の第403"ウォルフ"スコードロンに装備されたトマホークIIA。トマホークIIAはP-40Bの英空軍向けで，武装は機首に12.7mm 2挺のほか主翼に7.7mm機銃が2挺。イギリス空軍には110機が引渡された。

〔下〕同じく英空軍のトマホークIIB。IIBはP-40Cの英空軍向けの機体で，主翼の7.7mm機銃は4挺に強化されたほか，燃料タンクを自動防漏式にするなどの改造をしている。英空軍には635機が装備された。写真では，機首のラジエター吸気口カバー，カバー後方の調整用"ヒレ"などがよくわかる。

↓ Tomahawk IIB.







↑ Kittyhawk III of No. 250 "Sudan" Sqdn.

〔上〕英空軍の第250 "スーダン" スコードロンに装備されたキティホークIII。機首の機銃を廃し、大きく垂れ下った形のラジエターとなったP-40D以降の英空軍向けの機体にはキティホークの名がつけられた。キティホークIIIはパワーアップしたアリソンV-1710-73エンジン(1,325HP)を積んだP-40KとP-40M(V-1710-81エンジン)の英空軍向けの機体。616機が英連邦空軍に装備された。

〔下〕カナダ空軍の第111スコードロンに装備されたキティホークI。アラスカの山岳地帯上空を飛行中のもの。カナダ空軍には1942年3月の25機を皮切りに，数10機のキティホークが引渡されており，カナダ防空の6個スコードロンが本機で編成されている。

↓ Kittyhawk I of No. 111 Sqdn, RCAF.





１万５千機目のカーチスP-40

けて飛ぶ15,000機目のカーチスP-40。最終生産型のP-40N-40-CUである。機体には28カ国空軍のマークが付けられているが，P-40を使用した空軍は約15ヵ国空軍。この機体が付けているのは，P-40以外のカーチス製戦闘機を装備した各空軍のマーキングも含まれており，もちろん日本のように，ろ獲機を使用した空軍のものは付けられていない。

ンド，ソ連，ノルウェー，トルコ，ギリシャ，ポルトガル，ポーランド，中華民国，タイ，象牙海岸，ニカラグア，キューバ，グァテマラ，ボリビア，コロンビア，ブラジル，チリー，ペルーその他のマーキングが書かれているが，皆様には何ヵ国空軍が識別できますか。



Curtiss Aircraft Company's 15,000th fighter, P-40N-40-CU, carrying "make-believe" national insignia of 28 different countries. Less than 15 countries used the P-40 in fact.




⬆ Kittyhawk ⅠA of No. 15 Sqdn, RNZAF.

〔上〕ニュージーランド空軍第15スコードロンのキティホークⅠA。ニュージーランド空軍には，1942年春に装備された18機のキティホークⅠAにつづいて，7月までにさらに44機が到着，第14，15，16，17スコードロンが編成された。第15スコードロンは米陸軍空軍が装備していた23機のP-40も受領して，翌43年春，ガダルカナル方面に派遣されて任務についた。

〔下〕同じくニュージーランド空軍第15スコードロンのキティホークⅠA。後方に洋上航法の誘導機として使われたハドソン哨戒機も見える。写真は1944年1月，ラバウルを攻撃する米軍の爆撃機援護のために，ブーゲンビルのトロキナ飛行場に派遣されたときのもの。第15スコードロンは，第17，18スコードロンとともに，同地区で日本の陸海軍機を相手に激しい戦闘をくり返し，2月中頃までに100機近い日本機を撃墜している。

⬇ Kittyhawk ⅠA of No. 15 Sqdn RNZAF at Torokina airfield on Bougainville.





⬆ Kittyhawk ⅠA of No.75 Sqdn, RAAF.

〔上〕1942年7月頃，ニューギニア方面で作戦中のオーストラリア空軍第75スコードロンのキティホークⅠA。オーストラリア空軍では，1942年の2月に25機のキティホークⅠAを受領，本機で編成した最初の部隊，第75スコードロンは同年3月にニューギニア南岸の防空のためにポートモレスビーに派遣されている。到着早々に，来襲した零戦を迎え撃って，17機のうち7機を失なうという手痛い打撃を受けている。その後米陸軍空軍のA-24ドーントレスなどの直援に出動したが，消もうが激しい苦しい戦闘の連続であった。まもなく新しいキティホーク部隊，第76と77スコードロンが編成され，第75は76とともに，7月25日にニューギニアのミルネベイに移駐したが，上の写真はそのころのスナップである。

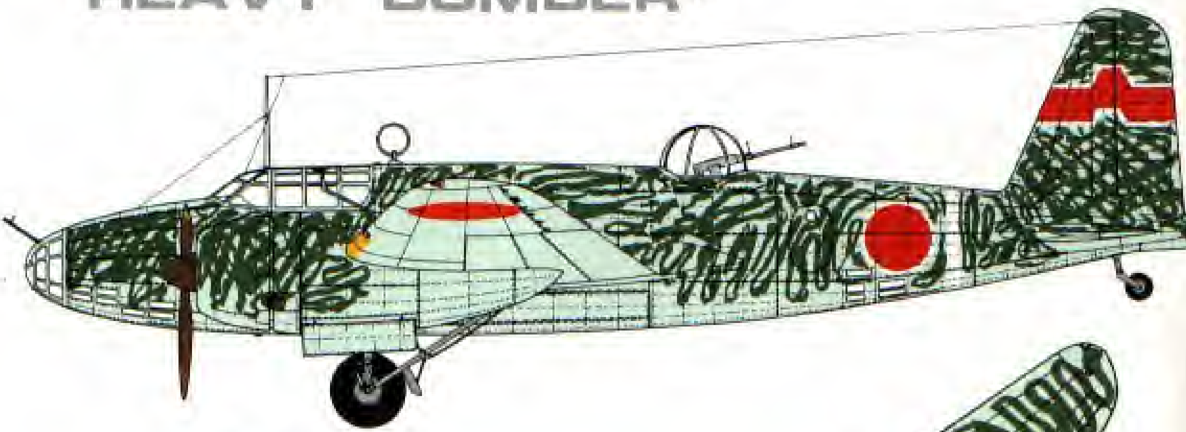
〔下〕左ページ下と同じく，1943年夏，ガダルカナルで作戦中のニュージーランド空軍第15スコードロンのキティホークⅢ。機体の塗装は，半年後には左ページ写真のように変った。

⬇ Kittyhawk Ⅲ of No.15 Sqdn, RNZAF.



# MITSUBISHI Ki21.II ARMY TYPE 97 HEAVY BOMBER / NAKAJIMA Ki49.II DONRYU

1/72 SCALE KIT

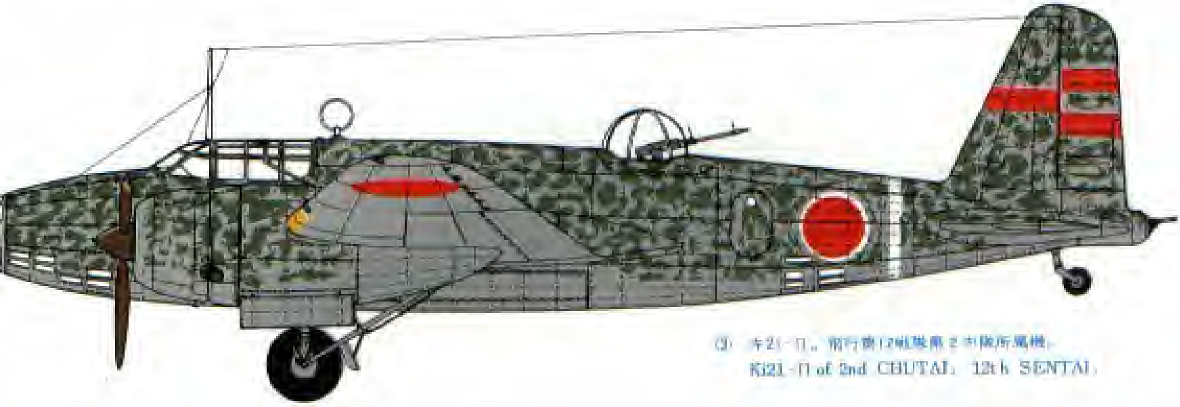


① キ21 II [illegible]
Ki21 II of 2nd CHUTAI, 4th SENTAI.

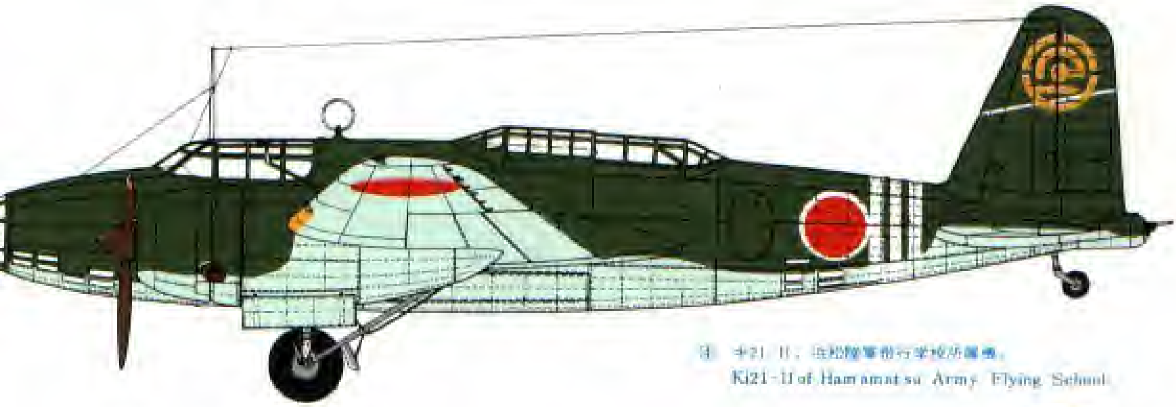




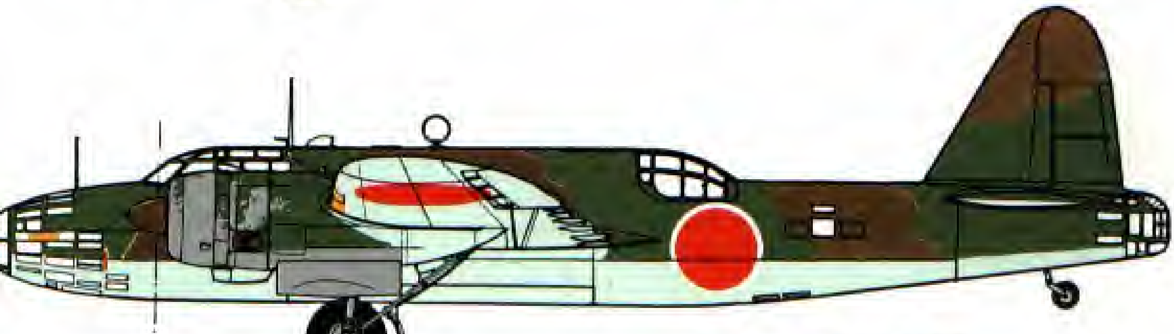
② キ21 II、蛇行迷彩機の塗装例。
Ki21-II of meander camouflage painting.



③ キ21-Ⅱ、飛行第12戦隊第2中隊所属機。
Ki21-Ⅱ of 2nd CHUTAI, 12th SENTAI.



④ キ21-Ⅱ、浜松陸軍飛行学校所属機。
Ki21-Ⅱ of Hamamatsu Army Flying School.



⑤ キ49-Ⅱ、所属不明の2色迷彩機。
Unit unknown. Two tone camouflage pattern.

⑥ キ49-Ⅱ、飛行第7戦隊第2中隊所属機。
Ki49-Ⅱ of 2nd CHUTAI, 7th SENTAI.



ハイモデリングのための
**レベル資料集**

# キ21-II 97重とキ49-II 呑龍

*Mitsubishi Ki21-II and Nakajima Ki49-II*



## ☆キットについて☆

キ21-II　97重の1/72スケール・キットが新発売されたのを機会に，同じく陸軍重爆撃機として有名なキ49-II「呑龍」のキットが，やはり1/72スケールで発売中であることを，お知らせしたい。「呑龍」と97重ともに，世界で最初にモデル化された本格的キットといえるもので，細部に至るまで忠実に実機のもつイメージが再現されている傑作である。

97重のデカルは飛行第98戦隊，第12戦隊，第７戦隊，第14戦隊，第８飛行師団司令部，第１飛行師団司令部，浜松陸軍飛行学校の合計７種が附属しており，「呑龍」のキットには飛行第62戦隊第１，２，３中隊，第７戦隊，第95戦隊，第12戦隊，第74戦隊第２，３中隊，第61戦隊，浜松陸軍飛行学校第２，３中隊の合計11種のバリエーションが楽しめるデカルが附属しているという，デラックス版である。

なお97重のキットは胴体上方銃座がコンバーチブルとなっていて，初期型と後期の球形銃座付のどちらかを選んで作ることができる。

☆　☆　☆

ここで，ちょっと旧日本軍用機の名称について考えてみると，初期の機体には97式とか零式などの記号名しかない機体が多いのに気がつく。そこでもし，こと97（キューナナ）式重爆に「呑龍」などと同ように名称がついていたならば，どんな名前がつけられていたか，ということを考えてみるのも面白い。

たとえば「珍龍」とか「鈍龍」に「豚龍」などは，とうてい名命されないわけだが「登龍」「馭龍」など，もっと勇壮な，しかも当時の軍人たちが好みそうな名前を考えてみるのも興味深いことではないだろうか。

## ☆塗装について☆

図①，②　飛行第98戦隊所属機。戦隊マークは九と八を図案化したもので白が第１，赤が第２，黄は第３中隊。塗装は図のように，明灰白色(56)で上側面に濃緑色⑯の蛇行迷彩または，上側面が濃緑色で下面明灰色の機体もある。

図③　飛行第12戦隊機で，戦隊マークは一二の図案化。塗装は銀地で上側面に濃緑色の迷彩があり，迷彩パターンは一定していない。

図④　浜松陸軍飛行学校所属機，上側面が図のように濃緑色または迷彩のある機体もあり，下面は明灰白色。

図⑤　所属不明の「呑龍」で初期タイプの迷彩機。上側面は濃緑色と茶㊾+⑦の迷彩で下面は明灰白色，カウリングと主脚カバに銀地の部分がある。

図⑥　飛行第７戦隊の「呑龍」。全面が銀地で，上側面にはん点迷彩があり，機首の光線反射よけはブルーブラックのつや消しとなっている。

（イラストと解説・橋本喜久男）



← 97式重爆Ⅰ型。所属部隊不明。
Ki21-I. Unit unknown.

↓ 97式重爆2型後期型。飛行第60戦隊所属機。
Ki21-II. HIKO 60th SENTAI.

**KIT :**

The commentator is pleased to inform you that the Mitsubishi Type 97 Heavy Bomber, Model 2, SALLY (Ki21-II) and the Nakajima Type 100 Heavy Bomber, Model 2, HELEN (Ki49-II, with Japanese popular name, "Donryu" meaning "dragon") are on sale from Revell in the 1/72 scale. No model makers have ever tried to seriously tackle these two Army heavy bombers in the 1/72 scale. They are really the kits of top-grade make, faithfully reproducing the real aircraft image.

The Ki21-II SALLY include seven kinds of decal: the Hiko 98th Sentai, 12th Sentai, 7th Sentai, 14th Sentai, 8th Hikoshidan Hq (aircraft division), 1st Hikoshidan Hq. and Hamamatsu Army Flying School. The Ki49-II Donryu is attached with eleven kinds of decal: the 1st, 2nd and 3rd Chutai's of the Hiko 62nd Sentai; 7th Sentai; 95th Sentai; 12th Sentai; 2nd and 3rd Chutai's of 74th Sentai; 61st Sentai; 2nd and 3rd Chutai's of Hamamatsu Army Flying School. The SALLY kit is convertible. You can make either the earlier version of a flat dorsal turret or the latter version of a dorsal but globe-shaped turret.

**Camouflage & marking :**

Fig. 1. Ki21-II of 98th Sentai. The sentai marking is a designed figures of "九" (nine) and "八" (eight). The white marking meant the 1st Chutai, red the 2nd and yellow the 3rd. Meander camouflage of dark green (Revell Color No. 16) upon the top and sides of the RC-56 light gray base. Some were painted dark green with light gray on the bottom surfaces.

Fig. 2. Ki21-II of Hiko 12th Sentai. The Sentai marking is the complex of the Japanese figures "一" (one) and "二" (two). The camouflage pattern was uncertain. Illustrated here was a dark green camouflage on the silver base.

Fig. 4. Ki21-II of Hamamatsu Army Flying School. Some of airplanes of this unit were camouflaged in dark green.

Fig. 5. Ki49-II, Donryu. This is the earlier pattern camouflage. The top and sides are RC43 plus 7, dark green and the bottom surfaces are light gray. The illustrated aircraft had white paints on the cowling and main gear cover.

Fig. 6. Ki49-II Donryu of Hiko 7th Sentai. Entire silver with dot-camouflage on the top and sides. The nose ainti-reflection paint is non-glare blue black. (Illustration & commentary by Kikuo Hashimoto)

Revell Color for SALLY and HELEN :

| | | | |
|---|---|---|---|
| 16 | Dark green | 56 | Light gray |
| 8 | Silver | 58 | Orange |
| 57 | Malachite green | 33 | Non-glare black |
| 28 | Black iron | 41 | Red brown |
| 3 | Red | | |

97重と呑龍の塗装に必要なレベル・カラー

| | |
|---|---|
| ⑯濃緑色 | ㊻明灰白色 |
| ⑧シルバー | ㊽黄橙色 |
| ㊼青竹色 | ㉝黒つや消し |
| ㉘黒鉄色 | ㊶レッドブラウン |
| ③レッド | 他 |



97式重爆2型。所属部隊不明。
Ki21-II . Unit unknown.

世界最初の実用ジェット戦闘機

# Me262

MESSERSCHMITT Me 262



Me262A-1a "Schwalbe"





今回は皆さまもうすっかりおなじみの世界で最初に実用化されたジェット戦闘機メッサーMe262の特集。設計開始は1938年だが、実戦に使われたのは終戦の約1年前。イギリス本土攻撃に躍起となっていたヒットラーは本機に爆撃機としての任務を与え、スピードを生かす本来の戦闘機としての完成が遅れたのは有名な話。戦闘機としての生産が認可されたのは1944年末。戦闘、爆撃、写真偵察、複座の練習、夜戦各型を含めて、1945年5月までに1,400機余が生産されたが、実戦部隊に配備されたのは、その4分の1を下まわる数であった。

〔前ページ〕2枚とも戦闘型のMe262A-1a。機首に30mmMK108機関砲を4門装備（上部の2門は各100発、下部の2門は各80発携行）、そのほか5cm空対空ロケット弾24発を装備できて、最高速度は高度6,000mで541mph（870km／h）。当時の連合軍のレシプロ高速戦闘機を約100mph（160km／h）も上まわる恐るべき戦闘機であった。前ページの上はイギリス軍がろ獲した1機、下はノボトニ部隊の所属機である。





262A-2a "Sturmvogel"



Me262A-1a of Kommando Nowotny

［左上・下］爆撃型のＭｅ262Ａ－２ａ。爆撃型は胴体下のラックに1,100－１ｂ爆弾２発を装備することができた。写真の機体（製造番号111711）は、連合軍側が無傷で手に入れた最初のＭｅ262。初飛行に飛び立った民間人のパイロットが、フランクフルトの連合軍側飛行場に不時着、米軍の航空技術諜報班員にろ獲されたもの。下の写真は1945年４月２日の撮影である。［上］Ｍｅ 262で編成した最初の迎撃部隊ノボトニ部隊のＭｅ262Ａ－１ａ。［下］これも1945年４月、ドイツの飛行場で連合軍にろ獲されたＭｅ262Ａ－１ａの１機。





Me262A-1 at an airfield somewhere in Germany April 1945.



Me262A-1a (W Nr. 13056) experimentally fitted with Lichtenstein SN-2 radar.

〔上〕機首に夜戦用のリヒテンシュテイン ＳＮ-２レーダー・アンテナをつけたＭｅ262Ａ-１。夜間戦闘型は、当初単座のＭｅ262Ａに新しく開発されたＳＮ-２レーダーを付けて実験された。レーダーの性能は満足すべきものであったが、レーダー手を兼ねるとパイロットに余裕がなくなるので、のちに複座とした夜間専用の戦闘型Ｍｅ262Ｂ-２ａが造られることになった。写真の機体(シリアル130-056)は、1944年10月、ＳＮ-２レーダーをつけてテスト中のもの。

〔下〕米軍が終戦の際に無傷で手に入れた夜戦型のＭｅ262Ｂ-１ａ。同機は米本国に運ばれ、外国の評価テスト機の記号「ＦＥ-601」がつけられて、フリーダム・フィールドやライトパタソンなどの飛行場でテストされている。現在は写真のように機首のアンテナがはずされ、フィラデルフィアのウイローグローブ海軍基地に展示されている。

〔右上〕これも連合軍にろ獲された爆撃型のＭｅ 262Ａ-２ａ。アウトバーンを滑走路にして出撃した１機で、その道端の森の中のハンガーから曳き出されたまま押収されたもの。胴体下の爆弾懸吊架がよくわかる。1945年４月27日の撮影。

〔右下〕戦後、Ｓ-92の名称でチェコスロバキアで組立てられた複座練習型のＭｅ262Ｂ-１ａの１機。同国で練習機として使われ、現在でもプラハの博物館に展示されている。

Me262B-1a/U1 on static display at Willow Grove Neval Air Station.





Me 262A-2a parked in front of assembly hanger in woods near Autobahn runway. April 1945.



Chechoslovakian Me262B-1a (S-92).



# 長距離爆撃機 キ74



1万キロ余を飛ぶ高々度超遠距離偵察機から米本土攻撃用の高々度長距離爆撃機という雄大な構想のもとに試作されたキ74。生産が思うように進まず、終戦まぎわにはサイパン島のB-29基地特攻攻撃機にかえられたが、訓練中に終戦を迎え、気密室をそなえたその高々度長距離性能を実戦で確かめる機会はなかった。ここの写真はいずれも甲府飛行場で、終戦直後に撮影したものである。

（本文80ページ記事参照）







終戦までに完成したキ74は原型2機を含めて全部で14機。任務が変り、製作を進めながら各種のテストが試みられたので、機首の小窓の形や風防の位置、背ビレの大きさなど、14機とも細部は少しずつ異なっていた。写真上はハ104-ル エンジンを装備した13号機。米軍に押収されて、胴体にはすでに米軍機マークが画かれている。写真下は米軍へ引渡すために日の丸を消して米軍機マークの記入。後方には6号機が見える。立川飛行機の工場があった甲府飛行場では、離着陸から空中操作などの基本性能の測定、装備審査など、終戦までテストがつづけられた。









The Ki74, first designed as a high-altitude long range reconnaissance plane, like the U-2 of today, was changed in its role to a long range bomber in order to attack the U. S. mainland. The intended role was again changed to bombarding the B-29 base on Saipan. The "grand-in-conception" high-efficient aircraft, equipped with the pressure cabin, however, had no chance to take the field, as it met the war-end while under training. Photo taken at Koku Works.







ここの2
枚も終戦直
後に甲府飛
行場で撮影
したキ74。
完成した11
号機までは
写真のよう
に、気密室
のキャビン
の下に、金
魚のおなか
のように爆
弾倉をふく
らませて装
備したかた
ちであった
が、胴体を
すっきりと
再設計した
キ74-II も
計画され、
昭和19年に
はモックア
ップが完成
している。
前ページ
右下の写真
では、胴体
後方下の観
測窓兼昇降
用扉がおろ
されている
乗員はここ
から乗り込
んで、前
気密室に入
った。後方
に見えるの
は米軍のア
ベンジャー

# 悲運の試作高速戦闘機

# ハインケル He100《続》




He100D-1s with spurious unit emblems, Spring 1945.

前号につづいてHe100。ここの2枚は偽装の部隊マークをつけたHe100D-1。1940年春ごろの撮影である。





このページと次ページも宣伝に使われたHe100D-1部隊。D-1はわずか12機作られたにすぎないが，この写真では堂々とした部隊に見える。電光と剣にハットの2種のマーク。防衛の任についた2個飛行隊というところ。







写真右上は夜間発進のときのスナップ，機首正面に20mmMGFFの銃口，主翼付根には7.9mmMG17機銃の銃口が口をあけている。





The pretended emblems attached for PR purpose hallucinated several units existing, though there were only 12 aircraft produced.







写真左上は緊急発進を想定して撮られた宣伝写真。外翼に上反角のついた主翼の平面形がよくわかる。左下と下は夜間発進のシーンで、134－135ページの機体とはまた異なったマークをつけている。写真上はエンジンの整備中。He100D-1の装備エンジンは、ダイムラーベンツDB601Aa 12気筒液冷エンジン（離昇出力1,175hp）。D-1は結局、マリアンヌにあるハンケルの工場防衛の配置についたのみで、実戦で敵の戦闘機と砲火をまじえることはなかった。






■サイパンでろ獲された

# 零戦テイル・レターのナゾ




5月号の「零戦シリアルのナゾ」でお伝えしたように、ワシントンの国立航空博物館では、来年7月に開館する新館用に、零戦52型の1機を復元中であるが、最近もう1機の零戦52型を復元することになった。これはコネチカット州ハートフォードのブラッドレー航空博物館に貸与して展示しようというもの。

この2機の零戦52型は、ともに1944年6月にサイパン島で米軍がろ獲した12機のうちの2機で、評価テストのため米国に送られた最初の52型といわれている。

国立博物館では、できるだけ現役当時に忠実な塗装にしたいとしており、現在復元中の1機には、第261海軍航空隊所属を示す「61-131」の尾翼記号をつけることになった。

サイパン島には、第261航空隊とは別に、写真のように8の記号をつけた零戦部隊がいたはずであり、ブラッドレー航空博物館用に復元する零戦には、この記号をつけようと計画中である。

しかし、この8の下にラインをつけた記号が、何部隊の所属を示すのかいまのところ解明されていない。

一説には、ルオット（マーシャル群島クェゼリン）で1944年2月21日に解隊した第281海軍航空隊の所属機が、尾翼のの記号はそのまま転属になったものともいわれており、8の字の下のラインは、特攻隊をあらわすとの説もある。

読者のみなさんで、この写真の機体について、さらにくわしくご存知の方は、編集部にご一報下さい。博物館に回送して、本機の来歴をあかす資料に供することにします。




# エアラインの翼

## エール　フランス　④

1930年代の海洋越えの遠距離エア・ルートには、数多くの飛行艇が登場した。故障の際に海上や河川に不時着すれば安全だと考えられたのである。その先べんをつけたのがフランスで、カムス53-1、ブレゲー530、ラテコエール300、521、ブレリオ5190などの飛行艇が地中海や極東、南米などの路線に登場した。

〔上〕1934年頃に地中海越えの路線に使われたブレゲー530。イスパノスイザ875hpエンジン×3、全幅35.06m、全長20.30m、自重8,430kg、最大離陸重量15,000kg、最大速度235km/h、巡航速度200km/h、航続距離1,100km、乗員2名、乗客21名。

〔下〕これも1930年代の大型飛行艇ラテコエール521。イスパノスイザH.S.12YDis　860hpエンジン×6、全幅49.31m、全長31.62m、自重21,480kg、最大離陸重量37,400kg、最大速度261km/h、巡航速度213km/h、航続距離5,900km、乗員5名、乗客30－70名。





# ジェット戦闘機の先輩たち

## アメリカ陸／空軍 ②

ジェット機の先輩たち、今回はアメリカで最初のターボジェット戦闘機ベルP-59エアラコメット。終戦とP-80の成功で発注機数は減らされ、試作型を含めて完成したのはわずかに66機。訓練や標的曳航機として使われたのみで、実戦に参加する機会はなかったが、アメリカ陸軍空軍のジェット戦闘機を方向づける基石となった記念すべき機体である。

〔上〕原型のXP-59A。〔下〕実用テスト用のYP-59A。〔右上〕生産型のP-59Aで、YP-59Aよりも全長が長くなって、垂直尾翼が小さくなっている。〔右下〕30機造られたP-59B。

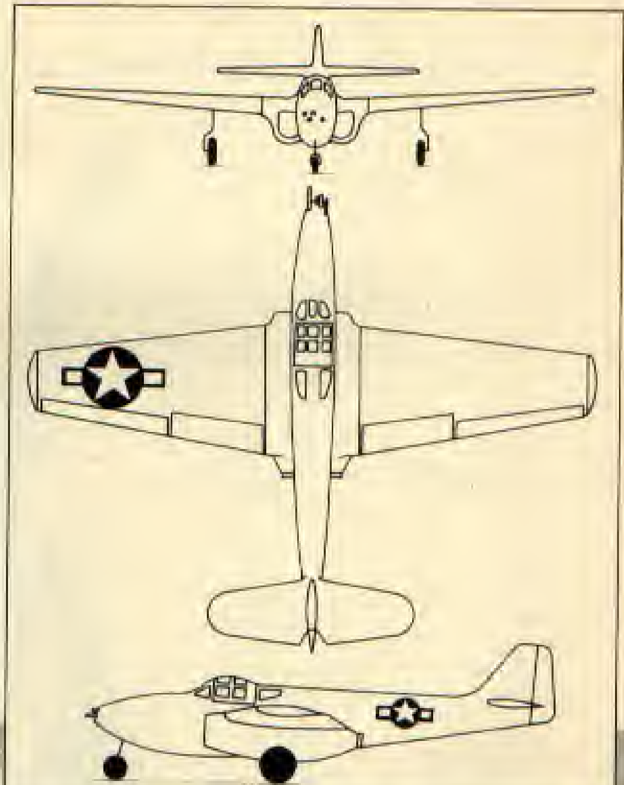





## BELL P-59 AIRACOMET

## ベル P-59 エアラコメット

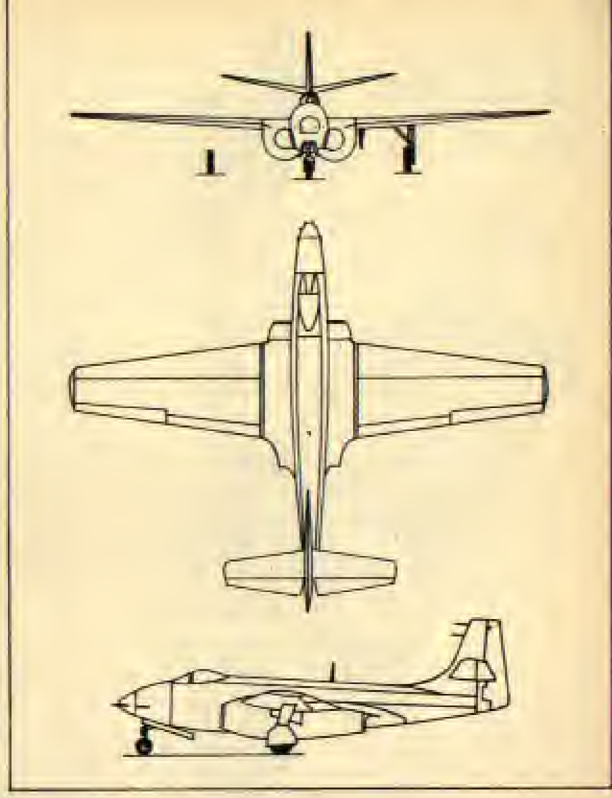
陸軍空軍当局からベル社にガスタービン動力の戦闘機の試作要求が出されたのは1941年9月5日。開発は極秘のうちに進められ、試作機には当時ベル社が計画していた双胴推進式のレシプロ戦闘機XP-59とまぎらわしいXP-59Aの呼称が与えられた（会社の呼称はモデル27）。1942年春から製作開始、原型のXP-59Aが3機と実用試験機YP-59が13機発注された。GEタイプI-Aエンジン装備のXP-59Aの1号機がミューロック（現在のエドワーズ空軍基地）で初飛行したのは42年10月2日。YP-59AはGE　I-16エンジン装備、さらにJ31-GE-3エンジンを積んだ生産型のP-59Aが20機、J31-GE-5に換装したP-59Bが30機生産された。







1945年2月27日に初飛行したXP-83の1号機。



BELL XP-83

## ベルXP-83

初期のジェット戦闘機の悩みのタネであった航続力の不足を改善するために、エアラコメットをもとに作られた試作機がXP-83。終戦まじかの1944年7月31日に原型2機製作の契約を結んで、1号機は1945年2月25日に初飛行したが、性能が思わしくなく、2機試作のみに終った。機体内に210ℓの燃料を積み、54ℓの落下増槽二つを装備した。機内燃料をふやしたので、エアラコメットよりもずんぐりと大きな胴体となった。

〔P-59Aデータ〕単座戦闘／爆撃機。エンジン：ジェネラル・エレクトリックJ31-GE-5（2,000-ℓbs.t）×2、全幅13.87m、全長11.83m、全高3.75m。自重3,605kg、全備重量5,760kg。最大速度664km／h(高度9,144m)、611km／h（高度1,524m）、最大巡航速度603km／h（高度9,144m）、航続距離386km（482km／h、高度6,096m）。武装：37mm機関砲×1 12.7mm機銃×3、1,000-ℓb爆弾×2。

〔XP-38データ〕単座長距離戦闘機。エンジン：ジェネラル・エレクトリックJ33-GE-5（4,000-ℓbs.t）×2、全幅10.66m、全長約13.71m、全高4.64m。自重7,266kg、全備重量9,842kg。最大速度839km／h（高度4,773m）、航続距離（機体内燃料)2,783km(高度9,144m）-3,298km（落下増槽）。30,000ft(9,144m）まで11.5分、実用上昇限度13,716m。武装12.7mm機関銃×6、2,000-ℓb爆弾×2。

